漢字は心の珠を磨く道具

幼児開発（幼児開発協会機関誌）

『井深大連続対談』より

かれこれ十年にわたる長い知己であるが、二人だけでじっくり話し合う機会はあまりなかった。お互いの考え方をよく理解しあっているだけに、対談はスムーズに……しかし、時折あたらしい発見、同感などを織りまぜて、進行した。

わが子に教えられて……

井深　もう永年のおつき合いですが、どうしてだか、対談に出ていただいたことはなかったんですね。十年ほど前、先生にいただいた名刺の裏には「九・鳥・……」（著者注＝鳩は烏よりも、烏は九よりも覚えやすい。これは私たちが幼児指導の実際を通じて発見した新しい真実です……という文）と刷り込んでありましたね。今の名刺にも？

石井　いや、今はもう使っていません。私を非難攻撃していた反対派の人たちでさえ、今では「あたりまえのことだ」と言い出していますから、名刺に刷り込んでおく必要はなくなりました（笑い）。

井深　私、鈴木鎮一先生の運動に興味を持って、音楽だけでなく、他のこともやってみようということで、幼児開発を始めたんですけど、これを、始めるか、始めないか、というころに先生とお会いしてね。石井先生の発言とか、石井先生の運動から、非常にいろんなものを教えられたと思うんです。特に、私が、生まれた時からのパターン・リコグニション（パターン認識）ということを、強く言い出した一番の大本というのは、どうも、先生の漢字の問題からだと思うんです。先生の漢字教育というのは、パターン認識の能力を現実に示した実験例じゃないかという気がしてるんです。石井先生が、世間から、どちらかというと白眼視されていたのを、「そんなバカなことはない。もっと現実を認識しなければならん」という立場に立ってきましたし、私の幼児教育の開眼に、非常に大きな一つのインパクトを与えてくれた、と私は思っているんです。しかし、石井先生の初めからの運動の経緯という面では、あまり詳しく伺ったことありませんので、どんないとぐちで、どんなきっかけで、どんな風に、何年ぐらいかけて、やって来られたか、ということ、ぜひ一つ、順序立てて伺ってみたいと思いますね。

石井　はい。私がこのことを一番最初に公けに発表しましたのは、昭和

二十六年の全日本国語教育協議会という、年に一回開催される、小学校から大学までの、国語を専門とする教師の研究会なんです。

井深　ほう、面白い集まりですね。

石井　私は、この年、ハ王子市の指導主事をしておりまして、その会に出まして発表しました……それがまあ最初だと言ってよいと思います。

井深　そうですか。それまでも、教室を持っておられたんですか。

石井　いえ、それまでは、子供を直接指導するということはしておりません。ただ、指導主事として、小学校や中学校を訪問し、先生方の相談に預っていただけです。そのきっかけというのは、私の長男が、まだ一歳何か月というときに、“教育”という漢字を読んだんです。

井深　教育？……ハハハハ。

石井　これには私も驚きました。まだ二歳にもなっていないのですから……。その時、私は“国語教育論”という本を読んでいました。それはちょうど冬で、こたつへ入っていたんですが、たまたま息子がよちよちとやって来て、私の膝に入り込みました。それで、私は読んでいた本を伏せて、こたつの上におきました。すると、その本の書名“国語教育論”の“教”を指さして“キョウ”と言ったんですねえ。ま、たまたま偶然に当たったんだろうと思いましたら次の“育”を指さして、“イク”と読んだので、これはもう“教育”という字を読んだのに間違いない。と思いました。それで、私はびっくりしまして、家内に「こんな字を教えたのか」と尋ねました。ところが、家内はあっけにとられたような顔をしているんです。そんな漢字など教えるはずがないというわけです。とすると、誰が教えたんだろうと、二人で考えました。

井深　うん！

石井　そのうち、家内が「そう言えば、教えてやったことがある」って言い出したんです。家内は、音楽学校出身ですから、毎月、“教育音楽”という雑誌を読んでいました。息子が、その雑誌の表紙を指さして、「これなあに、これなあに」って訊ねるもんで、何気なくそれを読んでやったような記憶があるっていうんです。

井深　ほう……。

石井　家内にはあるかないかの記憶ですが、息子にしては、疑問を持って訊ねて、教えられたことです。僅か一度のその機会で、“教育音楽”という文字がその発音と一緒に頭の中に納められたのですね。

井深　うん、パタンとね。

石井　ですから、漢字というものは、見かけによらず、やさしいものかも知れない。私はその時そう思いました。それからもう一つ。息子がそんなことをしている時代、私は、高等学校の教師をしていたんですが、英語も担当しておったんです。英語の学習では、小学校の一年生が初めて習う字でも、大人のものと変わりませんよね。ところが、日本の場合は、まず“がっこう”と習って、それに習熟してから、改めて“学校”という本字を習う……途中で変更するわけです。

井深　つまり、最初、仮名で習って、それから漢字に移る、ということをおっしゃってるわけですね。

石井　そうです。その“途中で変更する”ということが、果たして良いことなのか、どうか考えてみますのに、そういうことをやっている国は、世界広しといえども、わが国だけなんですね。

井深　うん、うん。

石井　この“途中で変える”ということは、学習する子供にとっては、大変苦痛なんじゃないか、と考えましてね。それと、息子の経験から、小さな子供がこんなに簡単に覚えられるものなら、最初から漢字で教えた方がいいんじゃないか、という考えを、その時に持ったんです。そうこうするうちに、“指導主事になりました。指導主事になって、小学校や中学校へ行ってみますと、一番の問題は、教科書が読めないということです。社会科でも理科でも、一番困るのは“教科書の漢字が読めない”ことだったんですねえ。

井深　小学校、中学校で……。

石井　ええ。中学校の先生は、特に、教科書が読めないことについて、一番頭を悩ましていると、そういうことでございました。それで、いよいよこの漢字教育というのは大変な問題だなあ、ということを感じたわけです。ちょうどそのころ、息子が幼稚園へ通う年ごろになっていました。……一歳数か月で漢字を読んだその時から、やり始めていれば、もっと面白いことになってたかも知れませんが、そのころはまさかそこまでには思い到りませんでしたから……。

井深　あ、そうですか（笑い）。

石井　で、幼稚園へ通うようになったところで、漢字を教えてみたんです。そうしますと、一年生が一年間に学習する漢字ぐらい、十日もしないで、みんな覚えてしまいました。それで今度は二年生の漢字を教える……これも一月もしないで覚えてしまいました。